

令和3年度における宮城県長期欠席状況調査（公立小中学校）の結果について

1 調査の趣旨

令和3年度における児童生徒の長期欠席の状況等を調査・分析することにより、不登校児童生徒等支援に向けた実効性のある施策の立案につなげていくものとする。

2 調査対象期間

令和3年4月1日から令和4年3月31日まで

3 調査対象（令和3年5月1日現在）

（1）児童生徒調査

- 県内公立小中学校長期欠席児童生徒（仙台市を除く） 3,784人
 - ・小学校 1,404人
 - ・中学校 2,380人

（2）学校調査

- 県内全公立小中学校（仙台市を除く） 377校
 - ・小学校 245校
 - ・中学校 132校

4 回答方法

児童生徒調査、学校調査ともに質問紙法による学校の回答
 （児童生徒調査については、担任をしていた教師等の見立ての回答）

5 調査結果の概要

（1）長期欠席の概要について（R3年度とR2年度比較）

- 長期欠席児童生徒数は、昨年度と比較して小学校で392人の増、中学校で621人の増である。
- 不登校は、小学校で231人の増、中学校で497人の増である。
- そのうち90日以上欠席の不登校は、小学校で61人の増であり、中学校で286人の増である。

（2）令和元年度から令和3年度における長期欠席児童生徒の状況について

区分 校種		長期欠席児童生徒（人）														
		病気		経済的 理由		30日以上 欠席		不登校				新型コロナ ウイルスの感染 回避		その他		総計
								(内数) 前回調査 でも不登 校	(内数) 90日以 上欠席	(内数) 出席10 日以下	(内数) 出席0					
小学 校	R3	166	11.8%	0	0.0%	925	65.9%	370	343	66	16	209	14.9%	104	7.4%	1,404
	R2	145	14.3%	1	0.1%	694	68.6%	370	282	49	15	98	9.7%	74	7.3%	1,012
	R元	230	23.5%	1	0.1%	676	69.1%	370	218	45	17	107	12.9%	72	7.4%	979
中 学 校	R3	213	8.9%	0	0.0%	1,999	84.0%	1,034	1,141	211	47	133	5.6%	35	1.5%	2,380
	R2	191	10.9%	0	0.0%	1,502	85.4%	1,034	855	196	49	35	2.0%	31	1.8%	1,759
	R元	187	10.4%	0	0.0%	1,562	87.3%	1,034	927	195	59	70	4.5%	41	2.3%	1,790
R3小中合計		379	10.0%	0	0.00%	2,924	77.3%	1,404	1,484	277	63	342	9.0%	139	3.7%	3,784
R2小中合計		336	12.1%	1	0.04%	2,196	79.2%	1,404	1,137	249	64	133	4.8%	105	3.8%	2,771
R元小中合計		417	15.1%	1	0.04%	2,238	80.8%	1,404	1,145	240	76	177	7.9%	113	4.1%	2,769

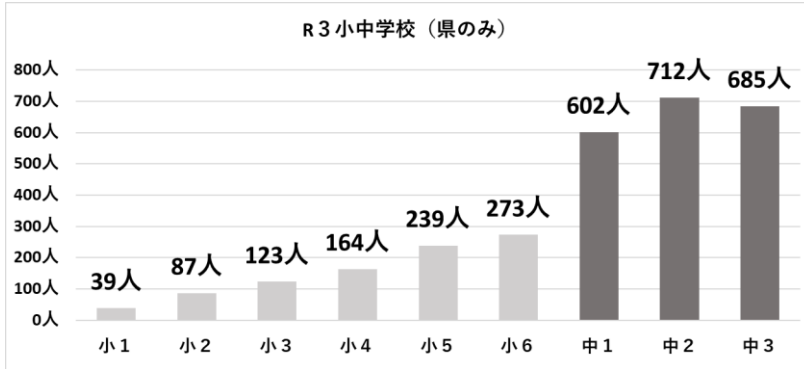
6 不登校児童生徒の状況について（児童生徒調査）

(1) 令和3年度における不登校児童生徒の状況について（学校が回答した不登校児童生徒の個々の状況）

① 不登校児童生徒の学年と不登校のきっかけと継続要因について

〈不登校児童生徒の学年〉

(単位：人)

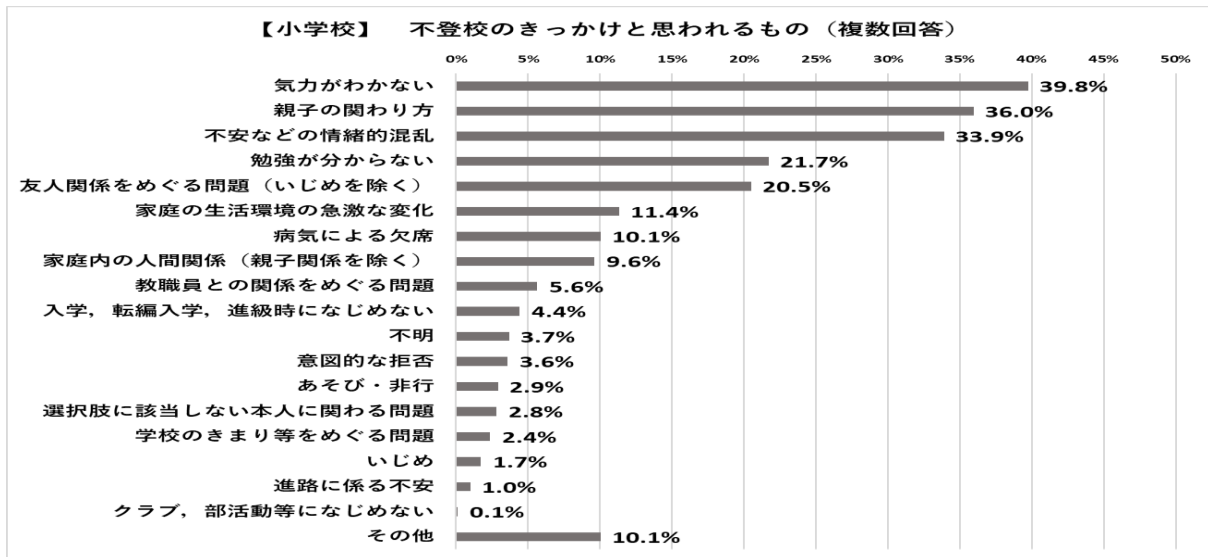


【不登校児童生徒の現状】
 ○ 小学1年生から小学6年生まで、学年が上がるにつれて、不登校児童数が少しずつ増加している。
 ○ 中学1年生で不登校生徒数が急激に増加し、中学3年生でやや減少している。

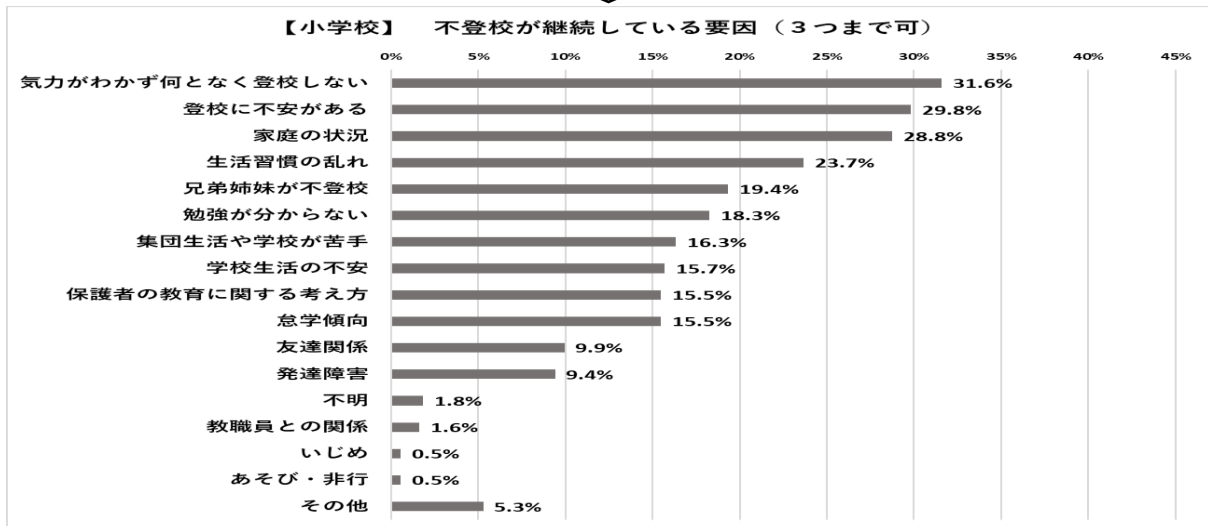
〈不登校のきっかけと継続要因〉

【小学校】

[きっかけ]※複数回答可

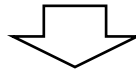
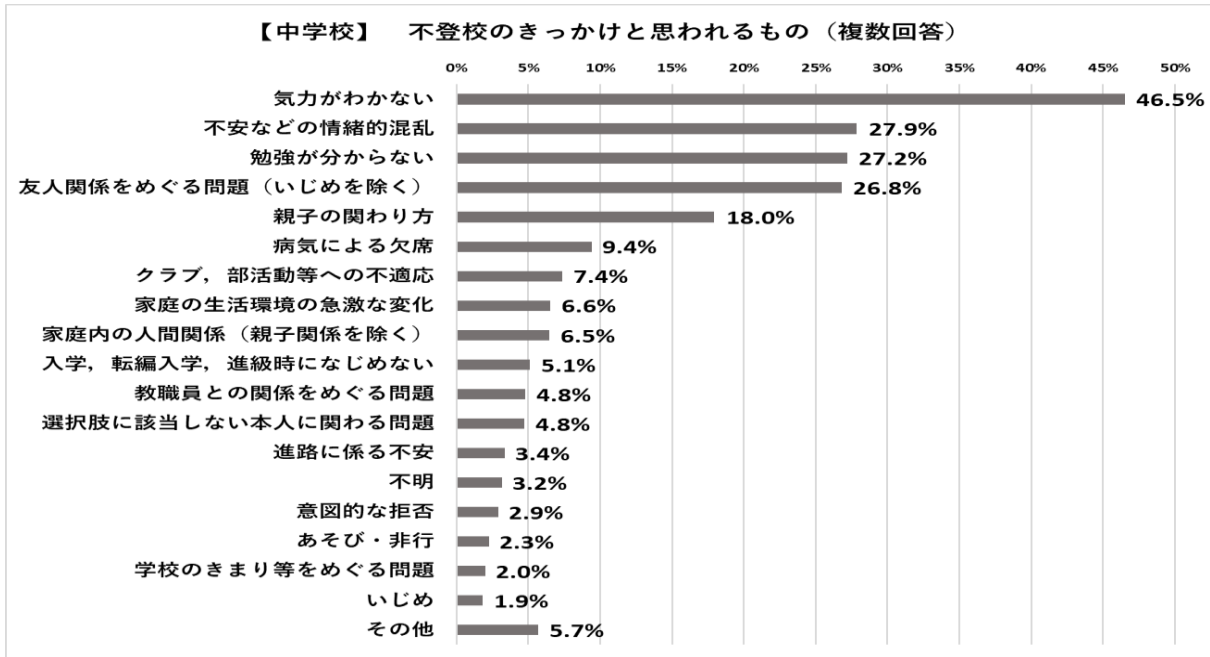


[継続要因] ※3つまで選択可

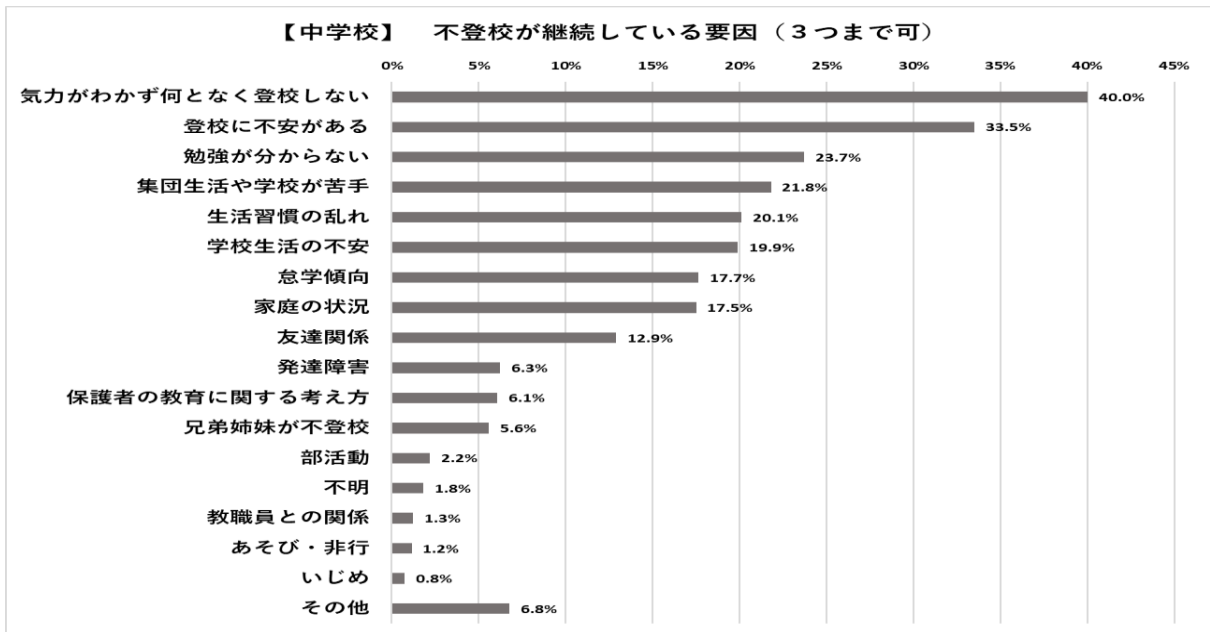


【中学校】

[きっかけ] ※複数回答可



[継続要因] ※3つまで選択可



【不登校のきっかけ】

- 小学校では「気がわからない」や「親子の関わり方」, 「不安などの情緒的混乱」が多い。
- 中学校では「気がわからない」や「不安などの情緒的混乱」, 「勉強が分からない」が多い。

【不登校の継続要因】

- 小学校では「気がわからず何となく登校しない」や「登校に不安がある」, 「家庭の状況」が多く, 主に本人や家庭に係る要因が多い。
- 中学校では「気がわからず何となく登校しない」や「登校に不安がある」, 「勉強が分からない」が多く, 本人に係る要因が多い。

② 不登校になったきっかけに対する不登校が継続している要因について

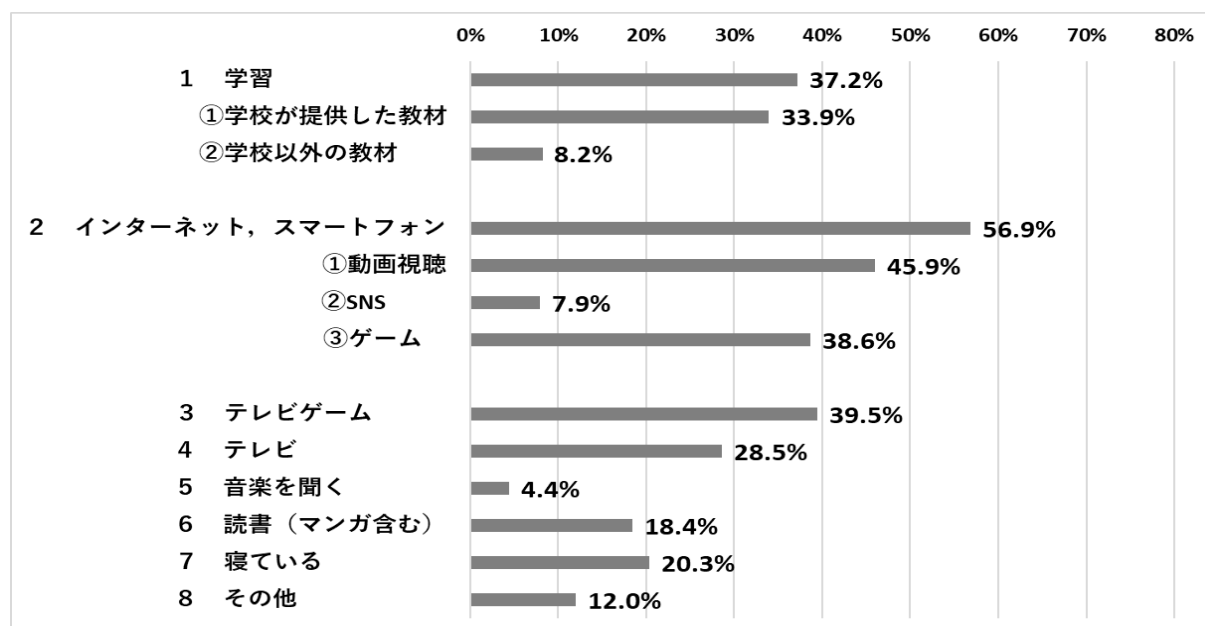
	不登校のきっかけ	不登校が継続している要因（上位3項目，複数回答）		
小学校	1 気力がわかない	①気力がわかず何となく登校しない	②生活習慣の乱れ	③家庭の状況
	2 親子の関わり方	①家庭の状況	②生活習慣の乱れ	③気力がわかず何となく登校しない
	3 不安などの情緒的混乱	①登校に不安がある	②学校生活の不安	③気力がわかず何となく登校しない
中学校	1 気力がわかない	①気力がわかず何となく登校しない	②勉強が分からない	③怠学傾向
	2 不安などの情緒的混乱	①登校に不安がある	②学校生活の不安	③集団生活や学校が苦手
	3 勉強が分からない	①勉強が分からない	②気力がわかず何となく登校しない	③登校に不安がある

- 小学校で「気力がわかない」がきっかけで不登校になった児童が多く、「気力がわかず何となく登校しない」「生活習慣の乱れ」「家庭の状況」が要因で不登校が継続している。
- 中学校では「気力がわかない」がきっかけで不登校になった生徒が多く、「気力がわかず何となく登校しない」「勉強が分からない」「怠学傾向」が要因で不登校が継続している。

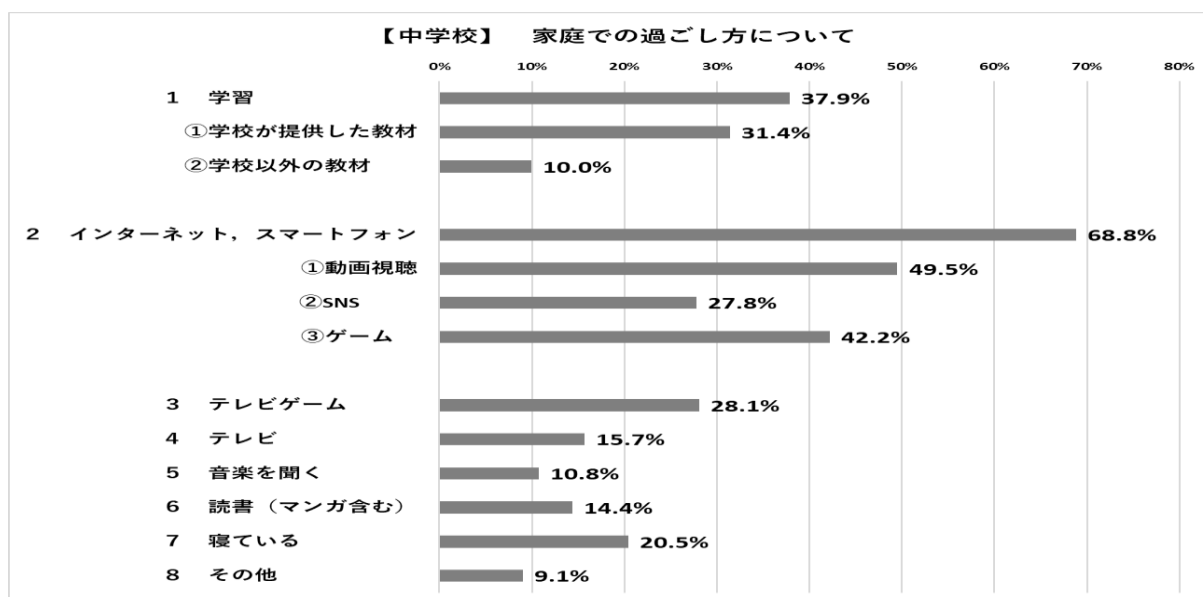
(2) 家庭での過ごし方 ※学校がある昼の時間帯に主に何をしているか。（3つまで選択可）

- 小中学校ともに、インターネット，スマートフォンが最も多い。
- 小中学校ともに、学習している割合が約37%，昼の時間帯に寝ている割合が約20%である。

【小学校】



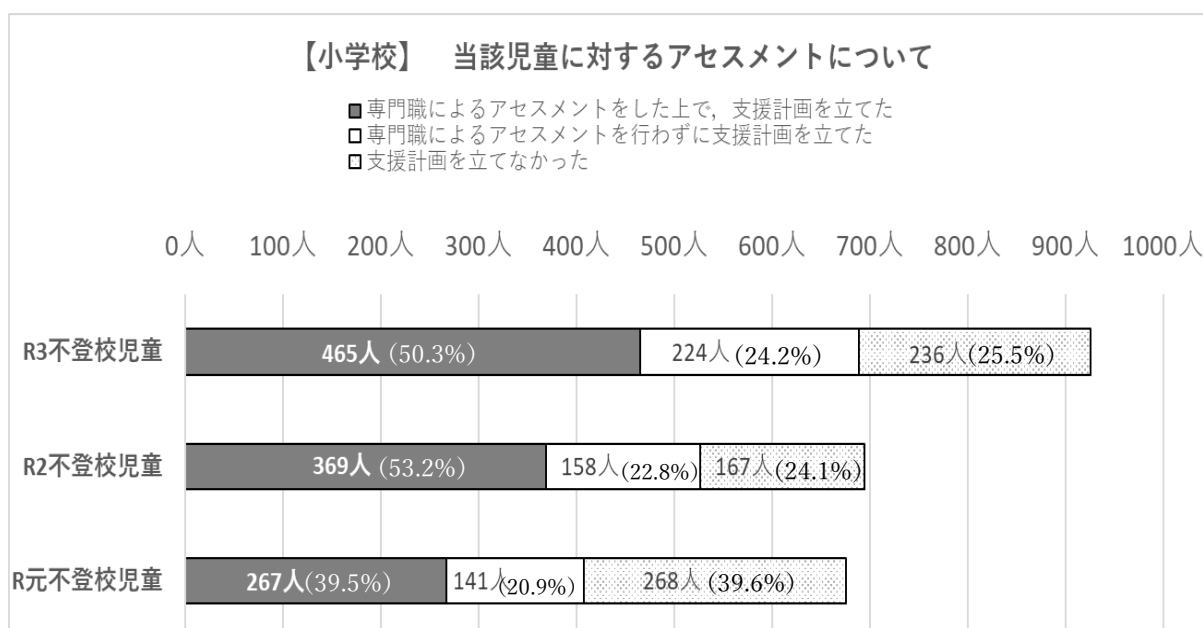
【中学校】



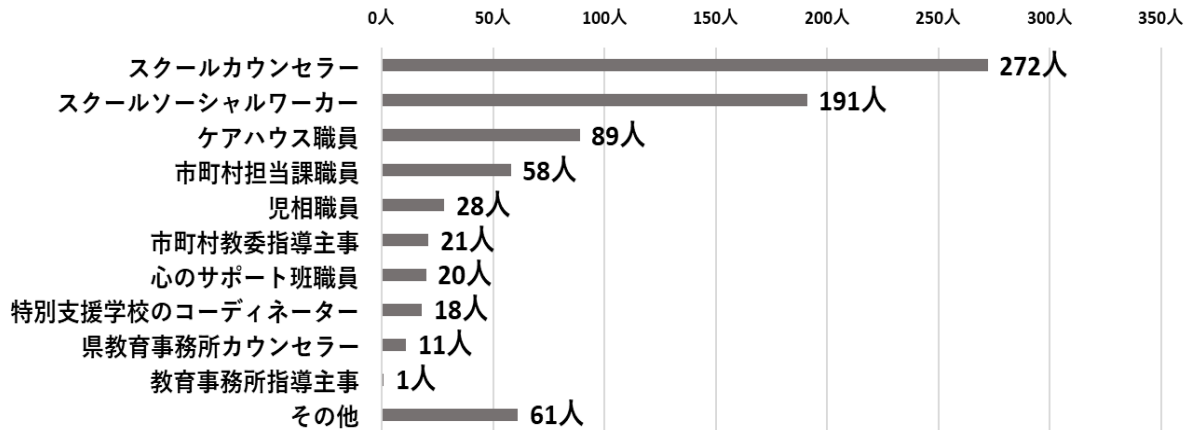
(3) 不登校児童生徒に対するアセスメント（見立て）について

- 支援計画を立てた児童生徒数は、小学校が689人、中学校は1297人である。その内、専門職によるアセスメントを基に支援計画を立てた数は、小学校が465人、中学校は952人である。前年度に比べ、小・中学校とも支援計画を立てた数は増えているものの、割合はやや減少している。
- 専門職の内訳は、「スクールカウンセラー」が最も多く、小学校では272人、中学校では609人の児童生徒の支援計画作成に関わった。「スクールソーシャルワーカー」は、小学校で191人、中学校では360人の児童生徒の支援計画作成に関わった。その他の専門職として、「みやぎ子どもの心のケアハウス職員」や「市町村担当課職員」などが挙げられた。

【小学校不登校児童】(925人中)



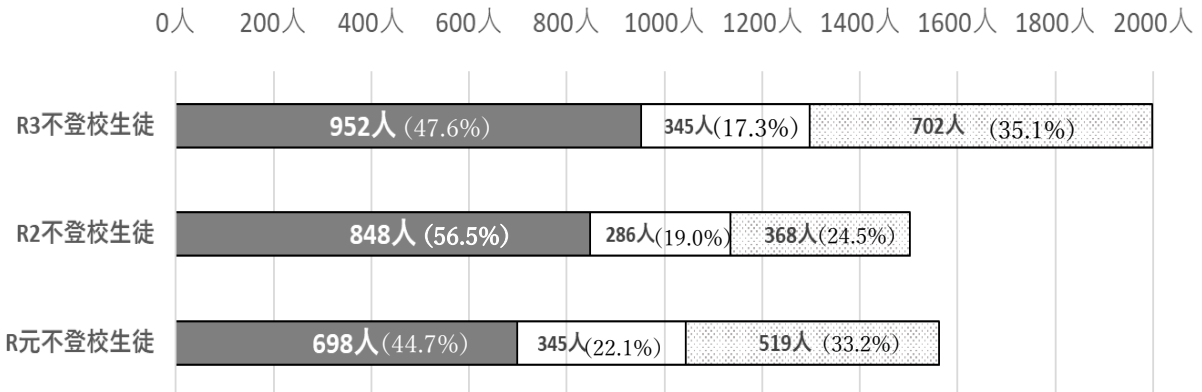
【小学校】 アセスメントに関わった専門職（複数回答）



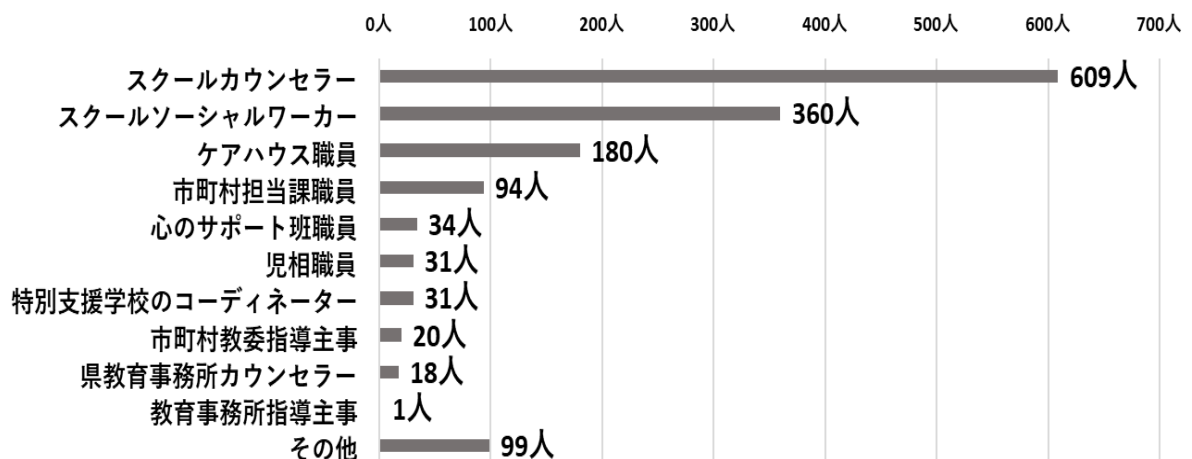
【中学校不登校生徒】（1,999人中）

【中学校】 当該生徒に対するアセスメントについて

- 専門職によるアセスメントをした上で、支援計画を立てた
- 専門職によるアセスメントを行わずに支援計画を立てた
- 支援計画を立てなかった

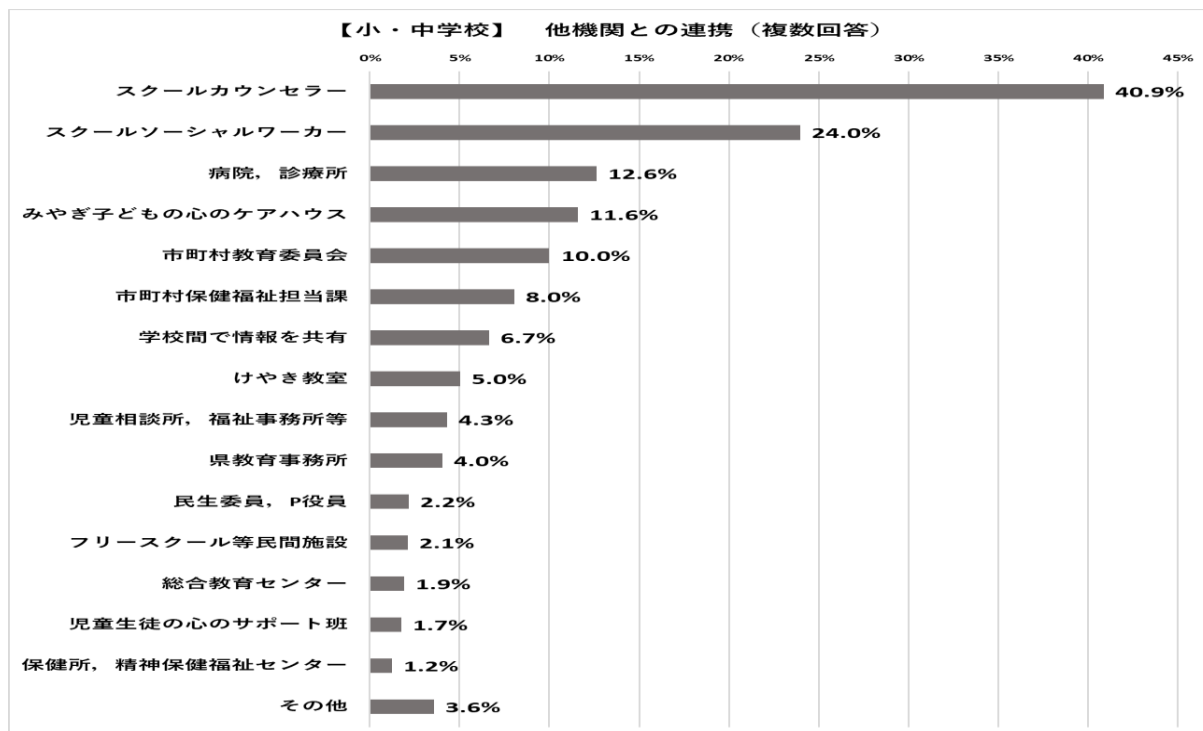
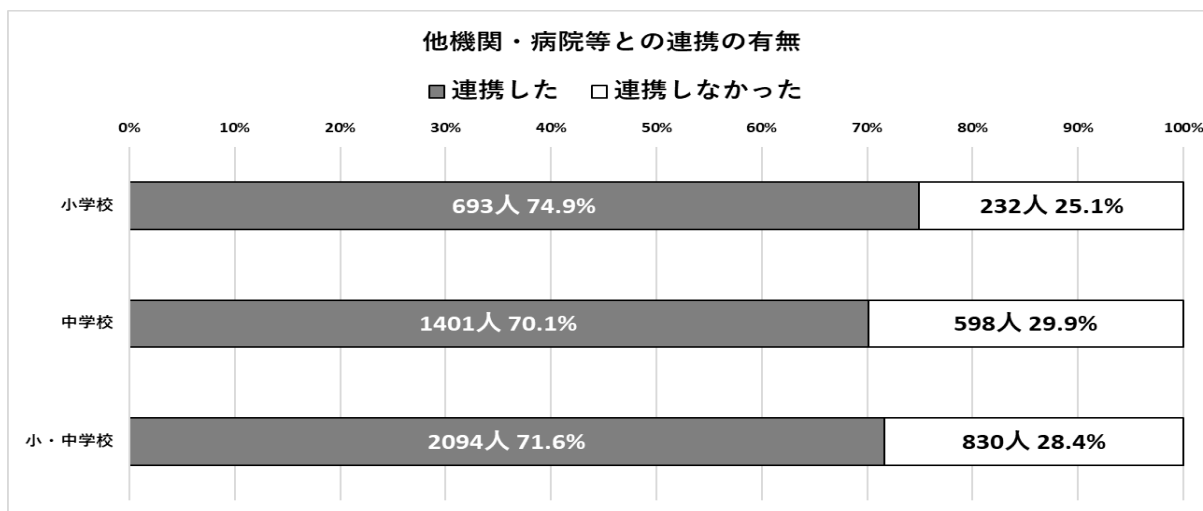


【中学校】 アセスメントに関わった専門職（複数回答）



(4) 学校における他機関等との連携について

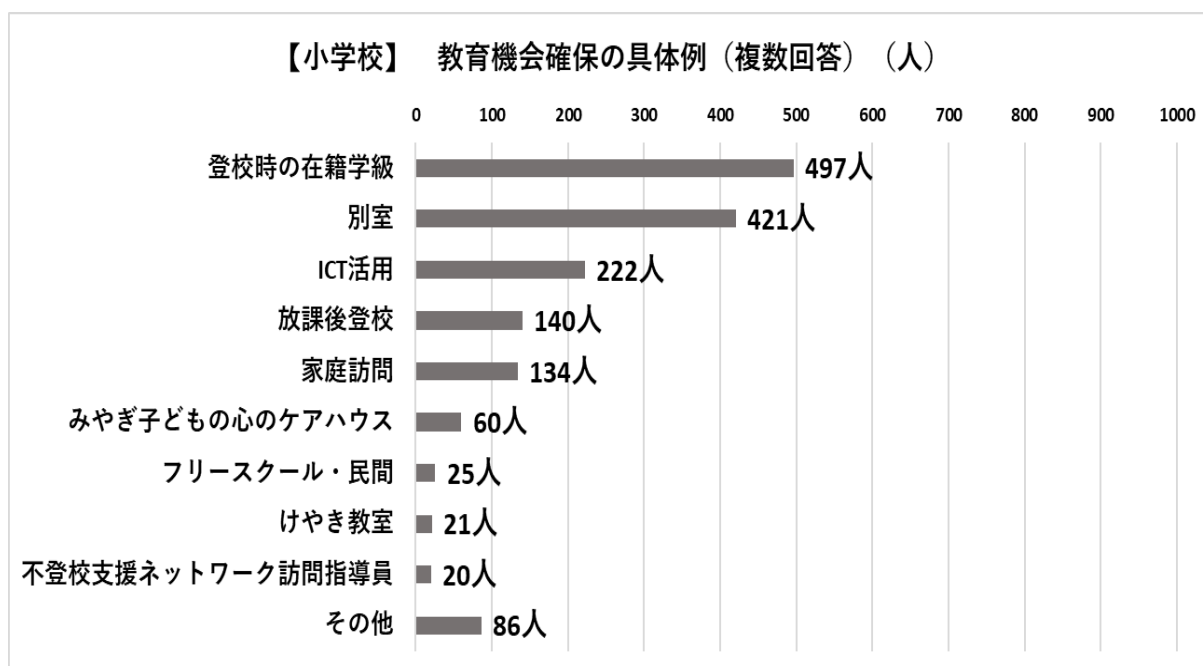
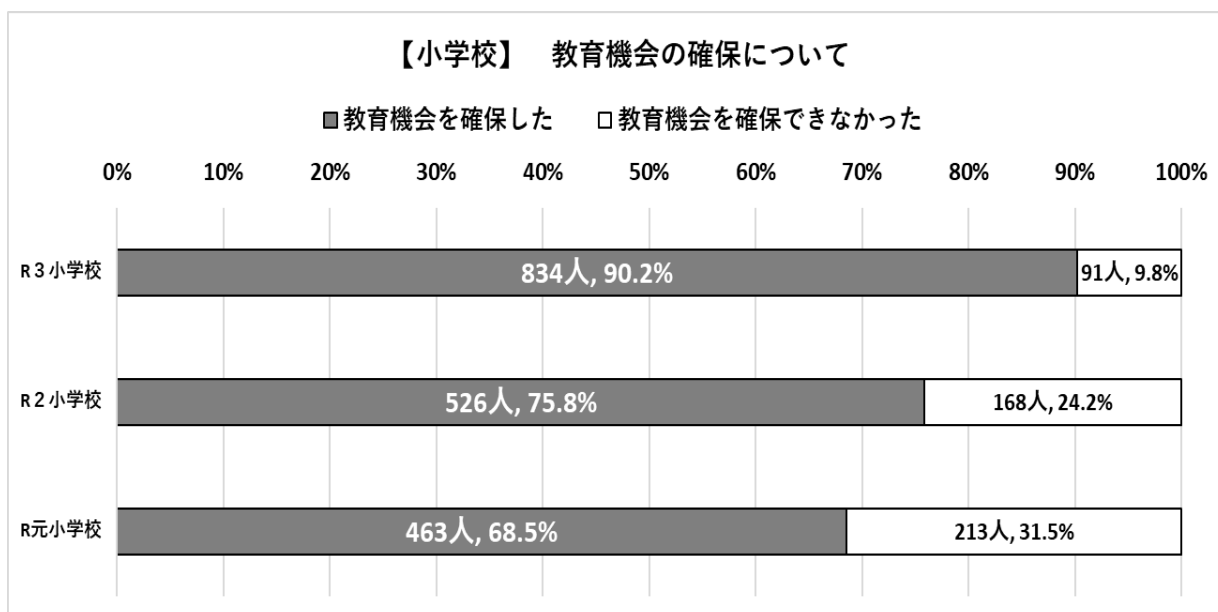
- 小学校不登校児童925人中,学校が他機関等と連携していたのは693人(74.9%)。連携していなかったのは232人(25.1%)である。
- 中学校不登校児童1,999人中,学校が他機関等と連携していたのは1,401人(70.1%)。連携していなかったのは598人(29.9%)である。
- 小学校及び中学校不登校児童生徒の他機関等との連携先の上位はともに「スクールカウンセラー」や「スクールソーシャルワーカー」,「病院や診療所」,「みやぎ子どもの心のケアハウス」である。



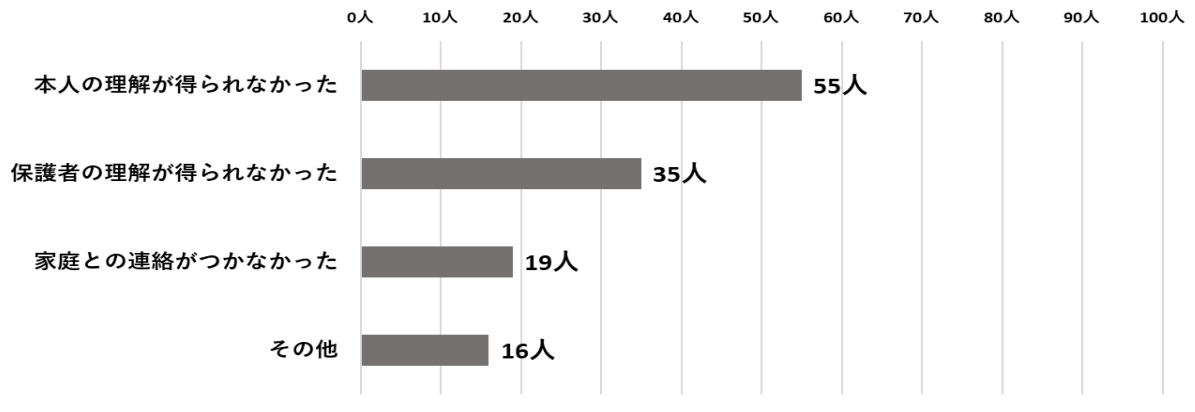
(5) 教育機会確保法に基づく、多様な教育機会の確保について

- 小学校では、90.2%の児童の教育機会が確保されており、具体例としては、「登校時の在籍学級での学習」が最も多く、次いで「別室での学習」や「ICTを活用した学習」が挙げられる。
- 中学校では、86.8%の生徒の教育機会が確保されており、具体例としては、「別室での学習」が最も多く、次いで「登校時の在籍学級での学習」や「家庭訪問を通じての学習」が挙げられる。
- 小中学校ともに、確保できなかった理由としては、「本人の理解が得られなかった」が最も多い。

【小学校】

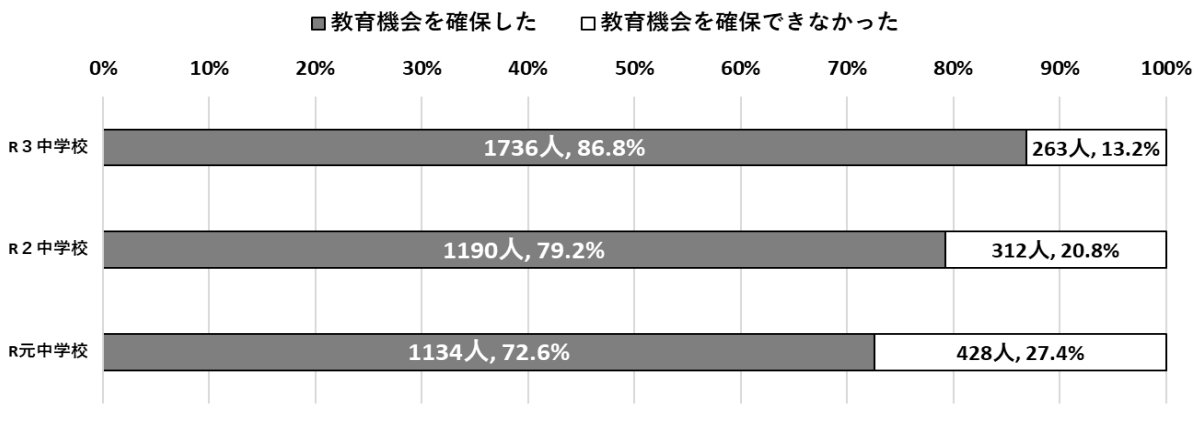


【小学校】 教育機会を確保しなかった理由（複数回答）（人）

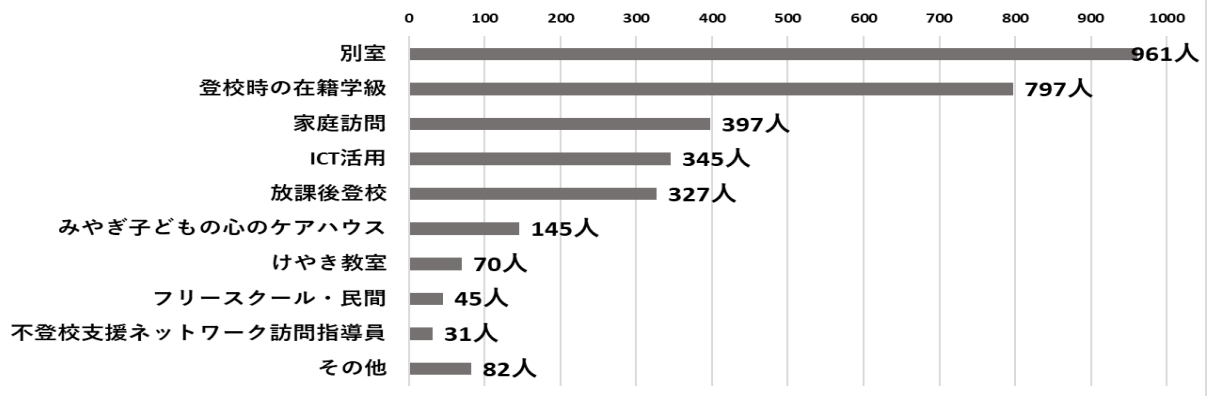


【中学校】

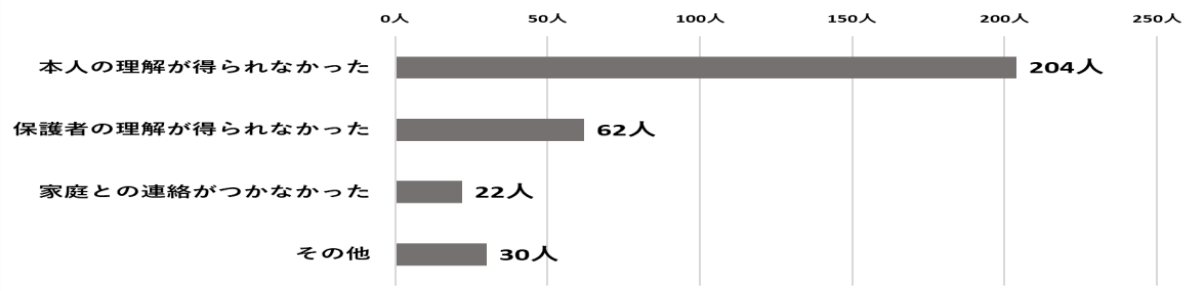
【中学校】 教育機会の確保について



【中学校】 教育機会確保の具体例（複数回答）（人）

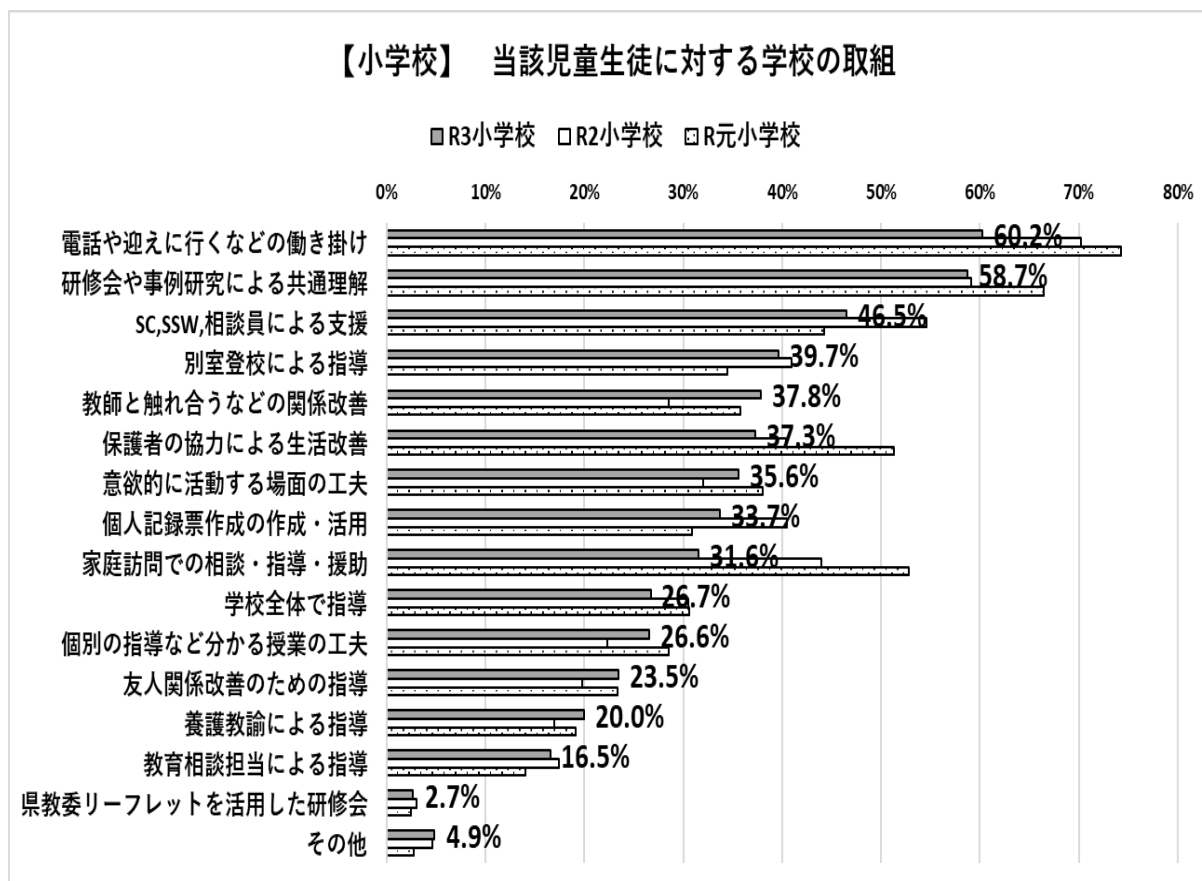


【中学校】 教育機会を確保しなかった理由（複数回答）（人）



(6) 校内での取組について

- 小学校では、「電話をかけたりに迎えに行ったりした」が60.2%と最も多く、「研修会や事例研究を通じて全教師の共通理解を図った」が次に多かった。
- 中学校でも、「電話をかけたりに迎えに行ったりした」が64.0%と最も多く、「不登校について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図った」が次に多かった。
- 小学校では、「教師との触れ合いを多くするなど、教師との関係改善を図った」や「様々な活動において本人が意欲を持って活動できる場面を用意した」、「授業方法の改善、個別の指導など授業が分かるようにする工夫を行った」が増えている。



【中学校】 当該児童生徒に対する学校の取組

